夏の彩り

切子モダニズム展

7月6日(火)～24日(土)

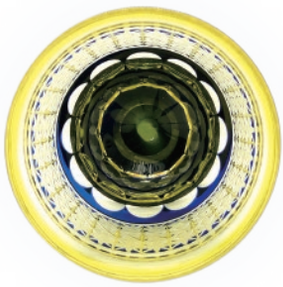
12:00～19:00

tsukuyomi

ART SPACE

月みちるBAR

福岡市中央区大名１丁目 10-5 サリナス大名２階
TEL:092－407－0072



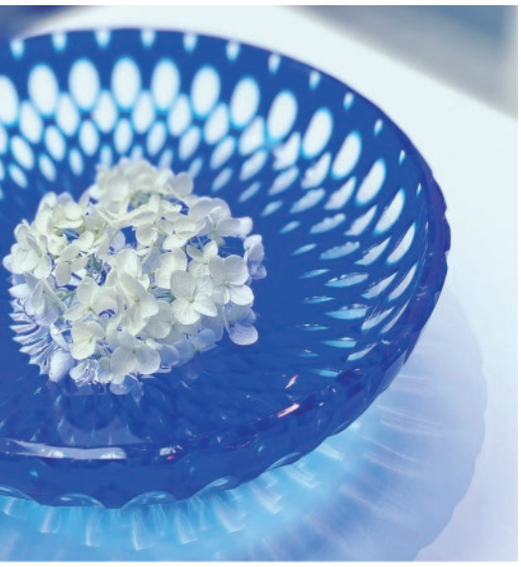
問い合わせ：切子モダニズム展実行委員会(株式会社 Gatou 白石　y-shiraishi@gatou.jp TEL:090-9070-7156)

手磨きのモダニズムカット

薩摩切子、江戸切子が深化したモダニズム・カットは
鋭いエッジと輝きにこだわった「手磨き」。
切子の美しさを追求した、名工 高橋太久美氏と
5 人のクリエイターの作品が盛夏に涼の彩りを添えます。

■

【出品作家】 高橋太久美　たきのさゆり　辻原夕見　滝下浩子　西眞り子　西村めぐみ



高橋太久美「復刻薩摩切子 脚付杯」

高橋太久美と薩摩切子の復元

1975年頃、大阪に存在したガラス問屋、カメイガラスで、由利精助氏が中心となり薩摩切子の復元が始まりました。高橋は1980年頃から氏の指導を受け、2 年後、薩摩切子復元の仕事に参加しました。以後カメイガラスが廃業するまでの1997年ごろまで薩摩切子に携わってきました。薩摩切子は「色」の部分が厚く大変見難く、高度な技術がもとめられます。カメイガラスの研究室以外で復元に携わったのは阪本光男氏と高橋の二人だけでした。

■薩摩切子

薩摩切子は、薩摩藩が幕末から明治初頭にかけて生産した切子ガラスです。長崎から伝わった切子は初め大阪で作られ、やがて江戸に伝わり江戸切子として花咲きました。さらにその影響を受け、厚被せの色ガラスに切子加工された薩摩切子が誕生し、その高い技術は世界的にも知られました。しかし、文久三年の薩英戦争で薩摩切子は一瞬にして廃絶したのです。当時作られた薩摩切子は現在150あまり見つかっており、サントリー美術館などに百数点が保管されています。
薩摩切子の大きな特徴は削られた面に現れる「ぼかし」です。
透明なガラスの上に色ガラスを被せて作る「色被せガラス」。それは当時、全国で唯一薩摩藩だけが持っていた技術でした。分厚い色ガラスの層を削ると色の層が下に行くほど薄くなり「ぼかし」ができるのです。そしてぼかしとともに大きく深いカットも薩摩切子の特徴です。

■たくみ工房

本格的な指導で切子技術を身につけられる全国でも有数のガラス工房です。主催者は切子歴50年の高橋太久美。切子職人としての高度な技術を駆使し、かつて存在した復刻版薩摩切子の制作にも取り組みました。
作家としても日本伝統工芸近畿展８回連続入選、新美工芸会展での受賞などの実績を持ちます。